

◆ 目 次 ◆

17	16	15	14	13	12	11	10
浄土へ帰る	三祖・良忠上人の入門	お念仏の教えを護る	善導大師像来朝	大別時念仏の奇瑞	浄土念仏を護らん	吉水から鎮西へ	再び法然上人のもとへ
23	22	21	19	17	16	15	14

法然上人の広めたお念仏の教えはまさに燎原りようげんの火のよう
ないきおいで人々の中に広まっていきました。その素晴らし
い教えを余すところなく受け継いだのが本書の主人公・聖光
上人です。

浄土宗のお念仏の教えは、あらゆる人々に阿弥陀さまの光
が注がれていることを説いていますが、初めて法然上人によ
って開かれたあと、それを護り広めていく者がなかったなら
八百年もの間受け継がれてこなかったはずです。

その護り広めていく役割をにない、土台をしっかりと固め
たのが浄土宗第二祖・聖光上人。いったいどのような方だっ
たのでしょうか。さあ、聖光上人の足あとをとともにみてみま
しょう。

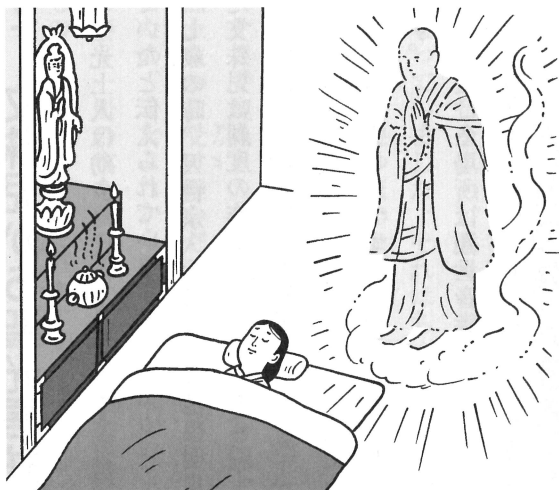
1 お誕生

聖光上人は平安時代後期・應保二（一一六二）年の春五月。筑前ちくぜんの国・香月かつぎの庄〔現在の福岡県北九州市八幡西区香月〕で元氣な産声をあげました。

父は香月彈正左衛門則茂、母は聖養といいます。父と母は毎日を幸せに暮らしてはおりましたが、子宝に恵まれないことだけがたった一つの悩み事でした。

父と母は相談した結果、大宰府の観世音寺に七日間のおこもりをし、祈願することになりました。七日後の結願の日の夜、不思議な夢をみました。それは、光に包まれた僧があらわれ「汝の胎をかりて、しばらく群生（衆生）を済度さいどしよう」といわれた夢です。済度とは救うことです。

その夢がさめてから、夫婦は良い子が授かる予兆だと共に喜びました。



そして夢でみたとおり、母は男の子を無事に出産しました。その子が後の聖光上人です。しかし、夫婦が玉のような我が子を囲んで微笑みあっていたのは、まさに一瞬でした。その夜、母・聖養の容態が急変、この世を旅立たれたのです。待望のわが子を抱きながら…。

それでも残された子は、母のつきぬ想いを一身に受けるようにすくすくと育っていきました。

2 文殊児もんじゅごから聖光房弁長へ

聖光上人は幼少時代、「文殊児（『智慧を司る文殊菩薩の意』）と呼ばれていたと伝えられています。

七歳の時、天台宗・大日寺〔本部は明星寺〕へ入門。ついで九歳になった文殊児は剃度ていどの作法（髪をおろすこと）を受け出家しました。

このとき、正式に「聖光房弁長」（以下、聖光上人と表記）という名が与えられ、十四歳の年に戒を授かりました。戒とは、仏道を歩む上で守るべき仏教の決まり事です。仏教では必ずおさめなければならぬ一つとされます。

戒を受けた場所は観世音寺。そこそ面影も残らない追慕の母が待望の子宝を授かるために一心に祈願したお寺でした。